

勘兵衛の屋敷跡

天下統一を目指した豊臣秀吉は、京・大坂などの都市全域の直轄領化を進めました。中世の公家・寺社・武家らが領主として町の屋敷地内から地子を徴収していましたが、秀吉は都市内での地子を免除する法令を出しました。この法令の恩恵を受け、都市に商人が集まり、税の免除により収入を増やしました。また、聚楽第・伏見城・大坂城の造営、朝鮮半島への出兵などの多大の経費を必要としましたが、その経費を得るため、商人の一部に特権を与えました。商人は陸運・水運の整備、秀吉のもとでの貿易の保護政策（重商政策）とともに、活発な海外貿易で多大の利益を得た豪商が生まれました。京では角倉了以、茶屋四郎次郎がその代表です。

ここで取り上げる勘兵衛町は、京都市上京区にある京都府庁西側に位置します。具体的には北は出水通^{でみず}、東は西洞院通^{にしのとくいん}、西は油小路通^{あぶらのこうじ}、南は下立売通^{しもだちうり}に囲まれた町域のほぼ中央に位置しています。

勘兵衛町については、慶長年中（1596～1615）に京の富者として

名を馳せた三人の勘兵衛のうち一人が居住したことが町名の起源であると、江戸時代の京都の地誌類を集めた『京都叢書』に記載されています。

発掘調査では、現在の勘兵衛町と丁字風呂町及び西大路町の町境と一致する箇所を柱列や溝などを確認しており、京都の



発掘調査地の空中写真（下方の建物が京都府庁）

町割りが、江戸時代から踏襲されていたことがわかりました。

勘兵衛がどのような活躍をしたかについては、わからないことが多いのですが、富者としての勘兵衛が有した財力の一部を示すかのような遺構と遺物を確認しました。



多くの遺物が出土したゴミ捨て穴の断面

発掘調査地は、勘兵衛町の南東部分に当たり、そこで一辺4 m以上、深さ2 mのゴミ捨て穴を確認しました。穴の底部が四角形に掘り込まれ、壁が垂直に立ち上がることから、破壊される前は財宝などを火災から守るための石室だったと考えられます。この石室からは、



出土した漆器椀面

は、中国製磁器や朝鮮王朝磁器をはじめ織部焼や志野焼などの陶器類、調度品や漆器椀、箸、下駄、刷毛、銭貨、釘、鞆さや金具、硯、碁石、砥石、焼き塩壺などが多量に出土しました。特に、中国製の華南三彩盤と同じ釉調をもつ男子像は、今のところ国内に出土例がありません。



三彩釉をもつ男子像

勘兵衛屋敷の北側には、茶屋四郎次郎が所在しており、同時代に活躍した二人が、互いに切磋琢磨しながらも親交を深めたのではと想像が膨らみます。

(小池 寛)